「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 4 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「分類する心」

北京市　王喬

私は、中国人の子供を日本の幼稚園に入れた時の面白い話を友人から聞いたことがある。幼稚園は、保護者に大きさやデザインの異なる鞄（文具用、着るもの用、靴用、食器用、毛布用）を用意し、それから A は長さ何 cm で、B は幅が何 cm、C は D に、E は F に入れるようにと指示してきたという。最初、中国人の保護者はどうしてそこまで煩雑なことをしなければならないのか理解できなかったが、後に子供が物を種類ごとに理路整然と整理することがきるようになると、保護者たちはその指示が子供の真面目さと分類能力を伸ばす第一歩だったということが分かったそうである。その話を耳にした時点では余り気にしていなかったのだが、最近になって日本のごみ分別に関する報道を見た時、私は、ふとそのことを思い出した。そもそも日本人は幼稚園児の頃から真面目に分類する心が育成されるよう配慮されており、だからこそ、ごみの分類も世界の最先端であるということがようやく分かったのである。

日本でのごみ分類の厳密さには感服させられるものがある。まず、大分類として、燃えるごみ、燃えないごみ、資源ごみ、粗大ごみ、有害ごみなどがあり、それから、各々いくつかの中分類に分けられ、さらに小分類に分けられるものもある。種類が異なるごみの扱いには、捨て方にも処理方法にも厳格な要求があり、規定の時間以外には排出することができないことになっており、出す時間を間違えると、罰金を科せられことすらあるのだ。また、古くなった家具や家電などの大きい物を捨てる時には、大型ごみの回収施設に予約したり、新しい製品の購入に合わせて古いものの回収を購入先に頼んだりする必要がある。これらはいずれも、日本では早くも 1970 年と 1971 年に法律で定められている。細かく述べれば、3 単位分の科目の履修に相当するかもしれない。

ある友人が日本へ研修に行った時、入国して“外国人登録証”の手続きをする際、専門の担当者からごみの分別に関する注意事項を説明され、“ごみカレンダー”を渡されたという。カレンダーは月替わりで、様々な色や記号でごみ分別に関する詳細説明と取り扱い方法が記されていた。その友人が東京に着いて最初に渡された書類もごみ関係のものであり、イラストが多くて文章も素晴らしい 12 ページ構成の冊子『資源とごみの分類と廃棄の方法』だったそうだ。彼が日本に行って最も厄介なことは何かと尋ねたところ、彼の答えは“ごみ出し”であったが、以外にも最も大きい収穫も“ごみ出し”と回答した。彼はカップラーメンの空容器を例に挙げて話してくれたのだが、外側のシュリンクフィルムは燃えないごみ、上面の紙蓋は燃えるごみ、カップは廃プラスチックなので、それぞれ分けて出さなければならないという。しかも、カップは水ですすいで乾かしてからでないと、廃プラスチックとして出せないそうである。

名古屋に住む別の友人も同じような事実を証言している。商業施設の出入り口そばにはゴミ箱が並んでいるのだが、それらは、ペットボトル、ガラス瓶、スチール缶、アルミ缶、段ボール、紙類、プラスチック製品、その他のごみと 8 種類にも分かれているという。その地域の住民は皆それらのゴミ箱が“好むもの”を十分に理解しており、特に意識することもなく正しいごみ箱へきちんとごみを捨てることができる。友人があまりに複雑なごみ箱に疑問を感じていると、学生らしき少年が二人やってきて、外した瓶の蓋をある箱に、瓶に貼ってあったラベルをはがして別の箱に入れ、ガラス瓶をまた別の箱に入れたのだが、かなり慣れた様子であったという。

日本のごみ分別制度では、ごみの減量（Reduce）、再使用（Reuse）、循環再利用（Recycle）の“3R”のライフスタイルが提唱されている。ごみの分別回収と再利用は、日本の循環型社会にとって重要な指標となっているのである。日本国民は、小さい頃から“世界には真の意味でのごみはないが、置き場所を間違えられた資源はある。”という教育を受けているのだ。

日本のごみ分別制度とそれに対する真面目な取り組みは、我々も大いに参考にすべきである。中国ではここ10 年～20 年、各都市でごみの分別と循環再利用を試行していて、街角には“回収可能ごみ”と“回収不能ごみ”の分類表示が見られるものの、どう分類すべきか本当に分かっている人は少ないため、ごみ箱の分類はほぼ有名無実となっている。日本人の真面目さ、細かな分類を見ると、我々がさらに出来ることは未だかなり多い。

全ては態度によって決まる。日本国民が真面目な心でごみの分別に向き合っているからこそ、日本のごみ分別水準は世界でも最先端なのである。これに関する我が国と日本との差はと言うと、恐らくソフトの面にあるのではないかと思う。つまり、政府と民衆のごみ分別に対する認識—政府のごみ分別に関する制度構築、民衆のごみ分別に対する真面目さと環境保全・省エネ意識である。みんなが手間を惜しまず、循環再利用の思想を確立し、真面目な態度できちんと分別しないと、ごみ分別において日本に追いつき、世界の先進的水準に達することは不可能である。これを成し遂げるには、日本に学び、“子供の頃から”国民の真面目に分類する心を培うべきかもしれない。

その時こそ、私たちが創造したごみが無く資源が循環再利用される社会を見ることができる時である。そして、これら全ての実現に必要なものは、我々のちょっとした努力だけなのである。